

ク喜心くすべてに感謝し、すべてを悦ぶク

H29. 12. 26 於、加茂法話会

① (『典座教訓』道元禅師一二三七年春、於、興聖寺撰述)

喜心とは、喜悦の心なり。想うべし、我れ若し天上に生ぜば、樂じやくに着ひまして間なく、発心ほつしんすべからず。修行未いまだ便ならず。何に況んや三宝供養さんぼうの食じきを作るべけんや。(中略)

いま吾れ幸さいわいに人間に生れて、而しかも此の三宝受用の食じきを作る。豈あに大因縁あらに非もつざらんや。尤もつも以て悦喜えつきすべきものなり。

喜心とは、喜びをもって事を行う心である。もし自分が天上界に生まれたならば、楽しいことだけに心を奪われて(楽しみばかりに執着してそのほかの時間も無く)、発心することができず、修行するには都合が悪い。ましてや仏法僧の三宝に供養する食事を作るなど、どうしてもできようか。(中略)

今、私は幸いにも人間に生まれ、しかもその上、この三宝に提供する食事を作るのであるから、これがすばらしい仏縁にならないはずがない。このことこそ、とりわけ喜ぶべき事である。

② どんなことでも起こり得る人生 ↓ 今、確かにわかっていること

「今、生きていること」「必ず死ぬこと」